

社会学における社会統制と 人間性の概念 Ⅰ

折橋 徹彦

社会統制と人間性の概念

われわれは、この研究のなかで、社会統制と人間性の概念に関する諸問題を、社会学及び社会心理学にまたがる領域の問題として検討する。この問題は一般に社会と個人の関係という漠然とした問題から出発する。

社会と個人の関係ということ、より具体的には、人間が社会のなかでどのように規制されているかということである。ここで、社会的な思考においては、一応、一般的な「人間」及び、普遍的に存在する社会的規制の過程というものが問題の対象となる。これは、具体的に、一定の歴史的現実のなかでの人間と社会の関係というものをあきらかにするという問題への接近の仕方とはことなり、社会と人間の関係に関する一般的な理論にみられる考え方を検討することになる。

社会学的思考のなかでのこの一般理論の確立にも、二つの方向がある。第一は、デュルケムに代表される考え方である。

社会的事実⁽¹⁾は人間の心理を拘束するとともに、心理に外在するすなわち、宗教、道徳、思想、などというものは、それぞれ社会的諸事実であり、それら独自の社会的様態を研究することが社会学の目的となる。ロスや、サムナーにみられる社会統制の研究においても、社会統制のメカニズムがどのような形態としてあらわれるかということが研究の対象となる。

第二の方向は、いわゆる社会学でも心理学的傾向の強いといわれるものにみられる。ここでは社会統制のメカニズムを人間の心理的メカニズムとの関係でとらえる。フロイドの他我・自我・超自我の三要素からなる自我構造の理論が、この考え方の代表的なものである。しかし社会統制の過程を人間の心理的メカニズムとして理解しようとする思考のなかでは、統制の過程を構成する具体的な社会関係はあまり考えられない。

ここで、われわれが社会統制の概念として理解しているものは、一般的には、「社会における集団内の秩序を維持するための社会過程⁽⁴⁾」と規定される。この統制は、形態的には、風習、慣行、規範及び流行となる。すなわち、それは人間の社会集団が存在する以上、成員に対して自然的な強制としてくわわる圧力と考えられる。人間の社会集団だけではなく、動物の集団にも、別の形態での統制の過程があるものと考えられる。

これまで、人間の社会を、このように自然的調和的なものとして、とらえる社会学的思考は、人間社会における権力的支配、政治的な暴力の衝突という問題を社会学固有の研究領域、ことに、社会統制の研究領域のなかでは展開してこなかった。

しかし、現代社会、特に、アメリカ社会における権力エリート
の分析のなかで、ライト・ミルズが問題とした大衆操作の概
念は、社会統制の一つの過程として、社会における権力をもつ
集団が、持たぬ集団を統制することが問題になることを指摘し
た。また、ここでは自己と利害が一致する集団の統制のごとく
して、まったく自己の利害と対立する集団の統制を、気づかぬ
まま受けていることが問題にされている。すなわち、現代社会
の研究における社会統制の概念は、このような問題をも対象と
できるものでなければならないといえよう。

ここで、社会統制との関連における人間性の問題にたちもど
つてみる。社会統制を心理的メカニズムとの関連で理解する方
向は、フロイトにはじまって、現在では、社会心理学のパーソ
ナリティ概念のなかで展開されている。正常に発達したパーソ
ナリティは社会統制の過程をスムーズにし、社会的葛藤、逸脱
行動は正常でないパーソナリティとの結びつきで考えられてい
る。

社会化されすぎた人間性概念

パーソナリティの概念が社会統制の過程の心理的側面の理解
に重要であるという場合にも、殊に、社会規範の内面化すなわ
ち、社会化 (socialization) が直接関係している。社会化の概
念は、一般には、人間が発達の過程で、社会生活に必要な諸技
術を学習していく過程と、その社会集団が社会統制をおこなう
過程に、うみだす社会諸規範を内面化していく二つの過程がふ

くまれる。人間がどのようにに一定の社会のもとで一個の社会的
人間になり、そこで持つ性質を一般に人間性のなかの「社会的
性質」(Social Nature)と呼ぶ。これは、人間が自然のまま、
生まれつきもっている、と考えられる「自然的性質」(Natural
Nature)と対立した概念である。

この人間の社会的性質の問題に関して、デニス・ロング
(Dennis Wrong)は、彼の「現代社会における 社会化され
すぎた人間の概念」(一九六〇)⁽⁶⁾で、一つの議論を展開してい
る。ロングの問題の出発点は、「社会的結合の源泉は何か。」と
か「社会秩序はいかにして可能か。」ということである。より
社会心理学的な言葉でいえば、「人間はどのようにして社会的
規律に服従するのか。」という問題になる。ロングは、ここに
提出した問題を「ホッブスの問題」の社会心理学的側面、「マ
ルクスの問題」のより厳密な意味での社会学的側面であるとす
る⁽⁷⁾。ロングがここで、この問題をホッブスのとするのは、「社
会の永続を可能にしている社会規範と社会目標の指導に人々は
どうして従うことができるか」ということである。またマルク
スの問題としては、「このような社会規範あるいは社会目標の
指導に人々が服従したとして、複合的な諸社会は、どのように
して諸集団間におこる破壊的な衝突を規制し、抑制することが
できるか。」ということになる。

ロングは、ここで、ベンディックス、ダーレンドルフ、コー
ザーとともに、「統合されすぎた社会に関する理論」に対立する。
すなわち、タルコット・パーソンズの理論に対する批判という

かたちで、かれは論を展開する。パーソンズは、「社会行為の構造」(一九三七)⁽⁹⁾において、ホップスの問題である秩序の問題を論じている。しかし、ロングのパーソンズに対する批判は、パーソンズが、この問題に対する解答を、問題からはなれた抽象化された形で出しているという点にむけられる。そして、このパーソンズの解答は現代の社会学理論に特徴的なものである。すなわち、現代社会学がこの問題に答える際の理論的基礎となる「人間性に関するモデル」そのものが、問題の本質からきりはなされている。

ロングは、社会学論における、社会的現実に関する質問に対する解答は、その質問ときりはなされるとき無意味なものになるとする。この意味で、ホップスが、社会に存在する問題を、弁証法的にその問題をつくりだす条件のなかで解決しようとしているのとは逆に、パーソンズは解答を問題ときりはなして、抽象化している。

このパーソンズの考えは、かれの理論の基礎となっている人間性の概念のなかに見い出される。

パーソンズは「社会行為の構造」のなかでデュルケムの社会的拘束の概念の解説をおこなっている。すなわち、デュルケムは、最初は拘束を、人間に外在的なもので、人間は、彼に課せられる制裁とか法によって統制されるとした。後に、デュルケムはこの過程を内的、心理的統制と考えるようになった。このことから、パーソンズは社会規範は人間にとって単に規制的ではなく、心理に構成されるものであると考えた。これは、フロ

イトの精神分析学の影響を受ける以前のことであった。今日多くの社会学者は規範の内面化の問題を、フロイトの超自我との概念関連で理解している。

この規範の内面化の概念は、今日、多くの場合、「学習」及び「習慣化」の概念と同一のものとして理解されている。しかし、フロイトの超自我との関連で、理解されている規範の内面化ということは、規範を内面化した個人のうちに社会的規制と個人の欲求の葛藤が生じるということである。しかし、今日の社会学者は他我の存在を忘れ、規範の内面化が、自動的に個人を社会に同調されると考えている。すなわち、規範の内面化は、他我の抑圧であり、逸脱行動は同調行動と弁証法的な関係にあるということが見おとされている。

次にロングが批判するのは、パーソンズの「期待による補完」(complementarity of expectation)の見解、「すなわち、社会的相互作用において、人々はたがいに、共有する規範に同調することによって、相手の承認を求め⁽¹⁰⁾る」ということである。社会学者は人間性における社会的要因、すなわち、社会的性質を強調することで、人間行動の社会化された動機ばかりを評価しすぎる。このことによって現代の社会学における人間観のなかには、超自我とか、自我—理想に導かれて行動する道德的人間という、同調的人間の像の前提となるものが否定されてしまっている。

更に、現代の社会学では、人間は役割演技者 (role player) としてとらえられ、ますます、状況のなかでの個人の行動に注

目がなされている。ロングは、現代社会のように複雑な社会のなかでの、諸状況に応じた役割演技者としての人間の概念の重要性をみとめる。しかし、構造なしの状況での人間の行動からのみ人間性をとらえることには限界があるとする。

ロングは、この三つの社会的人間の性質を強調した人間の概念は、人間の本質的部分をかいているという。すなわち、いかに社会秩序が可能かというホップスの問題には、人間性のなかに社会の秩序に対立する性質が想定されている。だからこそ、問題に対する解答は秩序を可能とするものを人間性のなかに見い出そうとすることができるのである。すなわち、物質的な関心、性的欲望、権力の追求というものは、人間性の一面として否定できない。同調と反逆、人間と社会秩序、社会規範とその違反という二つの面が一つの規実として存在している。ここでロングは「自然的人間」と「社会的人間」の二元論を試みているのではない。社会的人間でありながら、完全に社会化されない人間というものが考えられる。すなわち、社会的性質のなかに充分身体的性質が反映されるところに、人間性の現実がある。ロングが、かれら「社会化されすぎた人間の概念」のなかで批判した人間性の概念は主としてパーソンズの社会学の基礎となるものである。これは、構造機能学派において理解されている「社会化」の問題であり、また「役割演技」の問題なのである。社会学の社会化及び役割演技に対する理解には、これと異なるものがある。⁽¹¹⁾

また、ロングは結論として、人間は「人間になる」という過

程」において社会化されるとしても、個人が生まれたときに入るその社会の特定の「文化を伝承 (transmit)」するという意味で社会化される、とはかぎらないという。パーソンズは社会化の概念を文化及び社会的規範への完全な同調としたことによって、ホップスの問題に答えていないということが明らかになつた。

われわれは、パーソンズ社会学以外の社会学のなかで、社会統制と人間性の問題がどのように展開されているかをみる必要がある。

ロングが批判の対象とした人間概念で社会化と関連した理論は、パーソンズの理論の他に、今日の社会心理学のなかで一般的にあつかわれている社会化の問題がある。その一つの流れとしてフロム、サリヴァンなどに代表されたネオ・フロイディアンのパーソナリティ理論がある。そして、承認と求める者としての人間概念は、バックカード、リースマンの現代アメリカ社会の研究のなかに出てくるが、原理的には、ロングもいうように、役割演技の理論のなかに出ている。

ここでは特に役割演技に関する理論を検討していくことにする。ラルフ・ターナーは、パーソンズ及びリントンの役割理論のなかでは、一人の個人が他者の役割をとりいれる過程の分析があまり重要視されず、自己に課せられた役割をはたすことが問題となっていることを指摘した。⁽¹²⁾ このことによって、リントンはG・H・ミードによって展開された「I」と「me」の即興的な性格とか「me」の固定的な性格をして「I」と「me」の間で弁証法

的に転回する相互作用ということを無視している。

ミードを源流とするインタラクシヨナリストの理論をたどることによって、社会統制と人間性の関連についての一つの社会学の見解を明らかにすることができるかもしれない。

社会過程と意識の成立

インタラクシヨナリスト (Interactionists) の人間性概念と社会統制の関係をつかむには、まず、インタラクシヨナリストのパーソナリティ概念の基礎となる社会の概念を検討することからはじめなければならない。かれらのパーソナリティ形成の基礎となる社会の理解の仕方は、サリヴァンの対人関係理論のなかに特徴的なかたちであらわれている。すなわち、社会の人間に対する影響は原理的には一人の人間の他の人間の相互的な関係を通じて及ぼされる。いいかえれば、この二人の人間の相互作用の過程が、社会の原型となる。ここでは、社会は過程なのである。

この対人関係を基礎とする社会過程は、人間同志の単に静止した関係ではない。対人関係が成立するためには、相当のなんらかの働きかけが必要になる。この働きかけを相互作用という。この相互作用の過程が社会過程ということになる。

人間性はこの相互作用の場を通じて形成される、あるいは開発されると考えられる。人間の相互作用はいろいろな形態をとるが、一般には言語シンボルによるコミュニケーションの形となる。

この問題を、G・H・ミードの理論⁽¹³⁾のなかで検討する。ミードの理論における基本的問題を明きらかにすることによって、今日のインタラクシヨナリストの人間性概念と社会統制の過程についての考え方をより正確にとらえることができる。

まず、ミードの考えを一つづつ理解する作業からはじめる。ミードは社会過程をコミュニケーションの過程としてとらえている。また、コミュニケーションの成立を、行為との関係でとらえている。この行為との関連において、言語がどのように成立するかという過程においてのミードの説明のなかに、コミュニケーションの理論が展開されている。

ミードは、一個の生物体 (organism) と他の生物体との間における行為のやりとりに注目する。一方の生物体の態度はもう一つの相手の生物体に一つの反応をよびおこす。これを観察している観察者からみれば、この態度はジェスチャーといふことができる。ミードはジェスチャーを「ジェスチャー」という用語は他者の反応をひきおこす刺激となる社会的行為のはじまり(態度)と同じものとみなされる。」と規定している。動物の場合は、ジェスチャーの背後に観念があるとは考えられない。人間の場合はそこに観念があることが予想される。一人の個人のジェスチャーに観念があるとき、これに反応する相手の個人のうちに一つの観念が喚起される。ここに「意味のあるシンボル」(significant symbol) が成立する。

この場合、一つのシンボルは、第一の個人の経験のなかの一つの意味に照応している。そして第二の個人のなかに、その

同じ意味が喚起される。この段階に達したジェスチュアは、先の初期的段階のジェスチュアから区別された「言語」(Language)となる。

このジェスチュアは社会行動の過程のなかで、他の諸個人がある個人の社会行為に適応 (adjustment) する場面のなかで成立する。

ミードは「ジェスチュアが意味のあるシンボルになるのは、これらのジェスチュアが、それらが語りかけている他の人々のうちに顕在的に起る、あるいは、起ると思われる反応と同じ反応が、そのジェスチュアをつくった諸個人のうちにも内在的に起ったときである。」⁽¹⁶⁾という。すなわち、社会過程のなかでおこなわれる、ジェスチュアの会話において、そこに存在する意味の内容及び流れを個人が意識化することは、他者の彼のジェスチュアに対する態度をとるということによっておこなわれる。

このように、一つのジェスチュアは、それをつくった個人と、それに反応する他の個人の間の意味のあるシンボルとしての一つの意味に照応するためには、一定の社会集団のなかでおこなわれなければならない。

一定の社会集団の成員として、諸個人が一つのジェスチュアに一定の意味を照応させられるとき、個人は、他者とのジェスチュアによる会話のなかで意味のある態度をとることができ

る。諸個人にとって思考が可能になるのは、社会過程での他の個

人とのジェスチュアによる会話が内面化されるからである。

ここで、意味の概念がミードの理論の理解のために重要になってくる。ミードは意味を、人間の社会過程における、異なった人間同志の行為がいかにか適応しあうかという問題のなかでとらえている。意味が成立していることは、ジェスチュアによる会話のなかでは、あるジェスチュアが、それを受けた個人に、次の行動をひきおこすことによって明きらかになる。このように、意味は社会行為のなかに客観的に存在するものである。⁽¹⁷⁾意味は行為の心的 (psychical) な附加物でも「観念」でもない。

意味は、意味に対する意識があらわれるまえに、すでに、社会行為の過程のなかで成立している。意味は人間の経験のもっとも高い発達の段階において、言語という形で叙述される。しかし言語のやくわりは、すでに論理的あるいは、内在的に社会過程のなかに存在しているものを意識の段階にひきあげたにすぎない。

ミードは、意味の基礎を人間の社会行動の過程のなかに客観的に存在すると考えている。「意味のあるシンボル」(significant symbol) が人間的経験の過程に介在してきたとき、この意味が意識化される。

これまで、われわれは、ミードの理論のなかで、コミュニケーション過程における意識の成立について検討してきた。次に自己の成立、自己における「I」と「me」の分離を検討していかなければならない。

(1) エミール・デュルケーム (Émile Durkheim 1858—1917) に於ける社会的事実の拘束性の問題は *Les règles de la méthode sociologique* 1895. (田辺寿利訳、『社会学的方法の規準』一九四二) のなかで論じられてゐる。

(2) 社会統制論者として Edward A. Ross (1866—1951) *Social Control: a survey of the formation of the order*, 1901. William Graham Sumner, *Folkways: A study of the sociological importance of usage, manners, customs, mores, and morals* (1906 1st ed.) 1959, Dover Publications. などがある。

(3) S. Freud, *Massenpsychologie und Ich-Analyse*, 1921.

(4) 南博『社会社会心理学』一九五〇—一九五二頁。

(5) C. W. Mills, *White Collar*, 1951, p. 109. 拙稿「大衆統制の心理的基盤」『一橋論叢』五四巻一号、中頁一—二二頁。

(6) Dennis H. Wrong, *The Oversocialized Conception of Man in Modern Society*, in *Personality and Social System*, 1966, ed. by S. Smelser.

(7) *ibid.*, p. 69.

(8) Lewis A. Coser, *The Functions of Social Conflict*, 1956. Ralf Dahrendorf, *Class and Class Conflict in Industrial Society*, 1959. 社会統制と人間性の問題を検討

しつゝ、社会の統合に重点をおくパーソンズなどの構造—機能学派の考えと、社会的葛藤、社会変動などに重点をおく、コーザ、ギンズブルグにおける人間性とのちがいの違いを理解することは重要である。

(9) Talcott Parsons, *The Structure of Social Action*, 1937, pp. 89—94.

(10) Dennis Wrong, *op. cit.*, p. 74.

(11) 「社会性」のゼネキ・フロイトマンの理論が考えられる。拙稿「社会心理学におけるパーソンナリティ理論」『一橋論叢』五二巻一号、八月号を参照。

(12) Ralph H. Turner *Role-Taking: Process Versus Conformity in Human Behavior and Social Processes*, 1962, ed. by Arnold M. Rose.

(13) G. H. Mead, *Mind Self and Society*, 1934 ed. by Charles W. Morris. 本稿を執筆したのち第一版「精神」(mind) の誤りを認める。

(14) *ibid.*, p. 43.

(15) *ibid.*, pp. 45—46.

(16) *ibid.*, p. 47.

(17) *ibid.*, pp. 75—76.

(未完)
(関東学院大学講師)